翻訳

ジョルジェ・アマード『丁字と肉桂のガブリエラ』(四)

第一部第二章、原文九三頁から一二一頁までの翻訳

尾河直哉

(承前)

黒いストッキング

普段でも市(いち)の立つ日になるとバール・ヴェズーヴィオは慌ただしさを増すが、殺人事件があったその日の午後の客足はまったく異常としか言いようがなく、店はお祭りさわぎのような賑わいを呈していた。食前酒をひっかけにくる常連客と市(いち)のためにやってくる要員の他に、新しい情報を収集してはひとくさり批評しようという客がわんさかやってきた。歯医者の家を探るために浜辺まで行き、それから一休みしようと立ち寄った客たちである。

「いったいだれがそんなこと言ったんだ。あの女、まだ教会にいたぞ…」

ナシブはテーブルのあいだを飛び回り、従業員の尻を叩きながら、頭のなかでは今日の儲けを計算していた。こんな犯罪が毎日ひとつずつ起きてくれたら、夢にまで見たカカオ園をすぐにだって買えるんだが。

クローヴィス・コスタとバール・ヴェズーヴィオで会う約束をしていたムンディーニョ・ファルカンの周囲では事件の噂話で盛り上がっている。ところが政治的な計画に身も心も捧げ、そのことしか頭にないムンディーニョは、ひとり冷笑を浮かべていた。ひとたびやると決めた事柄は実現するまで中断しない。ムンディーニョはそういう男だった。いっぽう博士(ドウトール)と隊長(カピタン)ときたら、どちらも殺人事件以外の一切に興味を失ってしまったようで、午

前中の会話さえ脳裏からすっかり消えている。ただしムンディーニョは、浜辺で一緒だった歯医者を失ったことが残念でならなかった。当時、イリェウスでは海水浴がスキャンダルラスな目で見られていて、海に入る人はまれだったが、歯医者はそんな仲間のひとりだったのである。生来気性が激しく、こうして悲劇的な雰囲気が醸されると水を得た魚のようになる博士（ドウトール）は、シニャジーニャにかこつけて皇帝の恋人オフェニージアの話に及んだ。

「ドナ・シニャジーニャもまたアーヴィラ家の血を引いておりました。ロマンチックな女人を輩出する家系ですな。ドナ・シニャジーニャは従姉の運命を引き継いどるんでしょう。どちらも不幸な星の下に生まれついとったから」

「オフェニージアって、いったいだれのことだい？」と、リオ・デ・ブラソからやってきた商人が尋ねる。市のためにイリェウスにやってきたが、犯罪の細部を一揃え仕入れて村に持ち帰ろうという魂胆である。

「わしの先祖のひとりでな、詩人テオドーロ・デ・カストロに霊感を与え、ドン・ペドロ二世を夢中にさせた悲運の美女だよ。皇帝についてゆけなかったため、悲しみのあまり死んでしまった」

「ついていけなかったって、どこに？」

「どこにったって決まってるだろ、ベッドだよ。他にどこにいくってんだい」とジョアン・フルジェンシオが冗談を言う。

博士（ドウトール）がまじめに説明をした。

「宮廷ですよ。オフェニージアが皇帝の愛人になったところでなんの得にもならなかったから、兄貴が七つも鍵のかかった部屋に妹を閉じこめてしまった。この兄貴というのが、パラグアイの戦争に加わったルイス・アントニオ・ダーヴィラ大佐です。オフェニージアは悲しみのあまり亡くなりました。シニャジーニャにもこのオフェニージアの血が流れとるんです。悲劇を宿命づけられたアーヴィラ家の血がね」

ニョー＝ガーロが興奮した面もちで入ってきた。会話のテーブルに新しい情報を投げ込む。

「匿名の手紙が送られてきたんだってさ。ジェズイーノが農場でそれを受け取ったっちゅうわけだ」

「いったい誰が書いたんだ？」

一同はしばらく黙って考え込んだ。ムンディーニョはこのときとばかり小声で隊長（カピタン）に尋ねた。

「で、クローヴィス・コスタは？あれには話してくれたか？」

「あいつ、せっせと事件の記事を書いてたよ。新聞の発行まで遅らせたらしい。今晩、あいつの家で会うことになってる」

「じゃあ、おれは行くわ」

「行くって、こんな面白い騒ぎの最中に？」

「まあ、おれはこの土地の者じゃないから…」と輸入業者は笑いながら言った。

たぐいまれなる芳香を放つこんなに美味しそうな料理を前にし

てムンディーニョ・ファルカンがとったこの無関心な態度には居合わせた全員が驚いた。広場を横切ると、ムンディーニョが出会ったのは、ジョズエー先生が引率する修道女学校の女学生集団だった。輸出業者が近づいてくるとマルヴィーナの瞳はきらきらと輝き、口には微笑みが浮かんだ。しきりに服の乱れを直している。ジョズエーはマルヴィーナと一緒にいられて幸せなのか、学校が認可になったお礼を再三口にした。

「このたびイリェウスが賜った恩恵はすべてあなたのお陰で…」

「なあに、こんなのたいしたことじゃあ…」その姿はさながら、貴族の称号やお金や厚意を惜しみなく振る舞う王族といったところだ。

「今回の事件のことはどうお考えになります?」と、イラセマが尋ねる。燃えるような小麦色の肌をした娘で、家の庭に入る門のああたりでよく男に言い寄られている。

ムンディーニョの返事を聞こうとマルヴィーナが近寄る。ムンディーニョは両手を広げて言った。

「美しい女性が亡くなるというのはいつだって悲しいものです。とくにあんな恐ろしい死に方をされると。美女は神聖な存在だから」

「でもあの女、夫を裏切ったんですよ」とセレスティーナが咎めるような口調で言う。こんなに若くしてすでに立派な老嬢だ。

「死と愛だったら、ぼくは愛を取るな…」

「やっぱり詩をお書きになるんですか?」と言ってマルヴィーナが微笑んだ。

「だれが?ぼくが?お嬢さん、ぼくはその玉じゃないよ。ここで詩人といえばわれらが先生」

「ムンディーニョさんも詩人かと思いました。お口になさった言葉がまるで詩みたいだったから…」

「美しい言葉であることに間違いはありません」とジョズエーが加勢する。

ムンディーニョはマルヴィーナを初めてまじまじと見た。美しい娘だ。深く謎めいた目がおれを捉えて放さない。

「ムンディーニョさんは独身だからそんなことがおっしゃれるのね」とセレスティーナ。

「でもお嬢さんだって独身じゃない?」

みんな笑った。ムンディーニョはその場を後にした。マルヴィーナはもの思わしげな目でその後ろ姿を追う。イラセマは厚かましいほど笑った。

「ああ、ムンディーニョさま…」そして輸出業者が家に向かう通りに入り、遠ざかると、「んもう、なんていい男なの!」

バールでは、アリ・サントス――『日刊イリェウス』の時評欄を担当するアリオストとはこの男で、輸出会社の社員にしてルイ・バルボーザ文学会の会長――が身をかがめてテーブルにかぶさり、事件の細部をささやくような声で語った。

「あの女、素っ裸だったって…」
「全裸ってことか？」
「一糸まとわぬ？」隊長（カピタン）の声に煩悩が宿る。
「すっぽんぽんよ…身につけていたのは黒いストッキングだけ」
「ストッキングだと？」憤慨するニョー＝ガーロ。
「黒いストッキングか、おー！」と言って隊長（カピタン）は舌打ちした。
「自堕落な女め…」とマウリーシオ・カイレスが有罪宣告をする。
「きっときれいだったんだろうなあ」突っ立ったアラブ人ナシブの脳裏に突然、素っ裸のシニャジーニャが映し出された。黒いストッキングを穿いている。ナシブはため息をついた。

この細部はその後調書に記載された。黒いストッキングが官能の洗練に由来することはほぼ間違いない。青年歯科医はバイーア生まれの資産家の御曹司で、バイーアで歯科医の勉強を終え、免許を取るとすぐに、繁栄する豊かな土地という噂に惹かれてイリェウスにやってきた。青年が土地に馴染むまでに時間はかからなかった。浜辺の例のバンガローを賃貸で借りると診療所を開き、表通りに面した部屋に診察室を置いた。毎日十時から正午までと午後三時から六時まで、道ゆく人々は、大きな窓越しに、きらきら光る日本製の新しい金属椅子と白衣を着て患者の口をのぞき込むエレガントな歯医者を目にすることができた。歯科医の父親は、診療所を立ち上げるための元手と、特に最初のころは余計な出費がかかるだろうと月々援助資金を息子に与えていた。父親はバイーアの有力な商人で、チリ通りに店を構えていたのである。立派な設備が整ったこの診察室は表通りに面した部屋にあったが、アリと調書が証言するところによれば――「堕落した黒いストッキング」を穿いた妻の姿を農場主が発見したのは、寝室であった。オズムンド・ピメンテール先生の方はまったくの裸足。どんな色であろうと靴下を穿いてないばかりか、若く尊大な征服者を被う衣類はなにひとつまとっていなかった。農場主はふたりにそれぞれ二発ずつ致命的な弾丸をぶち込んだ。農場主は銃の腕に相当のおぼえがあって、道端の待ち伏せもお手の物、闇夜でさえ弾を外すことはなかったのである。

ナシブはてんてこ舞いだった。シコ・モレーザとビコ＝フィーノは混み合った店内のテーブルを縫って走り、あちらで給仕をし、こちらで事件の細部を聞き込んでくる。ちびくろトゥイースカも手伝っていた。毎日午後になるとトウモロコシやキャッサバの粉から作ったお菓子や、これまたキャッサバの焼き団子を歯医者の家に運んでいたので、今週分の支払いはだれがしてくれるのか知りたがった。ドス・レイス姉妹から皿に載せて送られてくる甘いものと辛いつまみが切れてしまったのにいっこうに客の引かないバールを眺めて、ナシブはときおりフィロメーナ婆さんを呪った。婆さんめ、代わりの料理女がいないってのに、よりによってこんなに大事件が次々起こる日に出て行く気になるなんて。テーブル

からテーブルへと駆けまわり、話の輪に加わり、友人と酒を酌み交わしながらも、アラブ人ナシブは、悲劇についておしゃべりする快楽に思う存分浸ることができなかった。料理女のことでこれほど頭を悩ませずに済んだなら、きっと楽しめたはずなのに。不倫の愛と死の復讐劇、しかもこんなに美味しい細部に満ちている。なんたって、ああ神様、黒いストッキングだ。そう毎日起こる事件じゃない。それなのにおれは、「奴隷市場」に着いた北東部移民のなかに料理女がいるかどうか確かめにじき店を出なければならないのだ。

グラスとボトルを手に持ちながら聞き耳をそばだてていた根っから怠け者シコ・モレーザが、客の話を聞こうとついに立ち止まった。ナシブが突っつく。

「こら働け、怠け者…」

シコはテーブルの前で立ち止まっていた。シコだって人の子だ。噂話には興味があるし、「黒いストッキング」のことも知りたい。

「それが最高級品なんだってさ、舶来ものの。イリェウスでは売ってないんだと…」とアリ・サントスが追加情報を披瀝する。

「きっとバイーアから取り寄せさせたんだろうな。親父の店を通して…」

「すごいなあ。この世にあるんだ、そんなものが…」マヌエル・ダス・オンサス大佐があっけにとられてぽかんとしている。

「ジェズイーノが入っていったときには絡まってたらしいぜ、おふたりさん。人の気配にも気が付かなかったんだと」

「でもジェズイーノが入ってきたとき女中は叫んだって…」

「あの最中はなんにも聞こえないんだよな…」と隊長（カピタン）。

「ご立派です。大佐は正義を全うなさった…」

マウリーシオ博士の話を聞いていると、周囲はすでに判決を聞いているような気分になる。

「大佐は、こういう場合われわれのだれしもするはずのことをなさいました。義の男として行動なさったわけです。大佐が妻の浮気を許すようなことはありません。そして妻の浮気で生えた角を矯める方法はただひとつ。大佐のとった方法しかないのです」

噂話は広がり、テーブルからテーブルへと伝わっていったが、町の名士の一部が集まるこのにぎやかな集まりにおいても、シニャジーニャを弁護する声はいっさい上がらなかった。三十五年間眠っていたシニャジーニャの欲望が歯科医の甘言で突如目覚め、燃えるような情熱へと変貌を遂げたというのに。歯科医の甘い言葉、カールした長い髪、広場のバール近くの小さな教会には矢で射抜かれた聖セバシチアウン像が主祭壇に飾られているが、その像のように潤んで哀愁を帯びた歯科医の瞳がそうさせたのだ。ルイ・バルボーザ文学会という文学愛好会では、日曜日の午前中、自作の散文や韻文を少人数の聴衆に朗読する集まりを開いているが、その会で歯科医と一緒だったアリ・サントスが語るところによれば、シニャジーニャが歯科医を自ら崇拝する聖（サン）セバスティア

ンに似ている、目もなにもかもそっくりだと思ったことからすべてが始まったのだという。

「教会なんかに行くからこんなことになるんだ…」と世に知れた反教権主義者ニョー＝ガーロが言う。

「まったくだわな。結婚しても神父の服の裾にまとわりついて生きている女なんざあ、ろくでもない女にきまっとるが…」とリベイリーニョ大佐が相づちを打つ。

三カ所に詰め物をした歯。日本製機械のリズミカルなモーター音を背景に聞こえてくる歯科医の甘い声。詩よりも比喩に富んだ美しい言葉…

「たしかにあの人には文才があった。あるときソネットを朗読してくれたが、これが完璧。韻が素晴らしくてね、オラーヴォ・ビラッキも顔負けだった」と博士（ドウトール）が断言する。

気むずかしくて陰気な二十歳年上の夫と、十二歳年下の歯科医ではなんという違いだろう！しかも聖セバスティアンのようなあの訴えかける目。この誘惑に耐えられる女がいるだろうか。そのうえ女盛りで年老いた夫がいて、その夫ときたら家を留守にして田舎暮らしばかり。飽きた妻をほったらかして、農場に来た新しいムラータやピチピチの混血に血道をあげている。しかも、心を砕き頭を巡らせるべき子供もいないとくれば、どうやってこれに耐えられるだろう？

「アリ・サントスさんよ、あんな恥知らずな女の肩を持つのはやめてくれないか…」とマウリーシオ・カイレス博士が割って入る。「操正しき女性こそ、家庭の堅固な砦だ」

「血だな…」と博士（ドウトール）が言う。永遠の呪いに押し潰されたような暗い声で言った。「アーヴィラ家のおぞましい血、オフェニージアの血…」

「また血の話か…あんたはプラトニックな恋物語とあの汚らわしいバカ騒ぎを同列に見たいらしいが、違いは一目瞭然だ。一方は土地の無垢な貴族の娘なのに、もう一方はただの淫らな女。美徳の手本のような分別あるわれらが皇帝陛下に対して、もう一方はあの堕落した歯医者だからな」

「だれが同列になど見ている？わたしは遺伝の話をしているだけだ。我が一族の血が受け継ぐ遺伝の話を…」

「おれはだれの肩も持っちゃいないよ。ただ事実を言っているだけだ」とアリが主張する。

シニャジーニャは教会の集まりに次第に興味を失って、発展クラブのダンス・ティー・パーティーに足繁く通うになったらしい。

「あれこそ風俗退廃の元凶…」とマウリーシオ博士が口を突っ込む。

…歯医者は診療を長引かせる。お次はモーターなしだ。ピカピカ光る金属製の治療椅子がいつのまにか寝室の黒いベッドに変わっている、というわけさ。シコ・モレーザがボトルとグラスを手に突っ立ったまま夢中で話に耳を傾けている。若い目を大きく

見開き、口もポカンと開けて、まるで間抜け。アリ・サントスが締めの言葉を口にした。シコ・モレーザにはそれが珠玉の格言のように聞こえた。

「以上、貞淑で敬虔で内気な奥方が悲劇のヒロインに変貌したいきさつだ」

「ヒロインだって？お文学はやめてくれ。おれはあの罪深い女をけっして赦さない。われわれとしてはどこまでやるかだ」と言ってマウリーシオは威嚇するように腕を突き立てる。「今回の事件はひとえに、われわれの土地を脅かし始めた風俗の乱れからやってきている。ダンスパーティーは昼夜大小あれこれやっているし、どこもかしこも宴会、宴会。映画館の暗がりじゃあ男女がいちゃついている。その映画とくれば、どうやって夫を裏切るか、どうやって堕落するか、そればかり教えてるしな」

「なあ先生よ、映画やダンスのせいになさりなさんなって。そんなもんができるずっと前から妻は夫を裏切ってたよ。それこそイヴが蛇にそそのかされた時代から…」とジョアン・フルジェンシオが笑う。

隊長（カピタン）もその通りだと言う。先生が見ているのは幻想です。もちろんおれだって本分を忘れた妻を赦す気にはなれない。ただ、発展クラブや映画館にその罪をなすりつけようとするのはお門違いじゃないか…それならなぜ夫の責任を問おうとしないのか。妻を顧みず、女中のように扱う一方で、娼婦や妾には宝石やら香水やら高価で贅沢な服やらあれこれ買ってやる。混血女（ムラータ）には家まで与えているじゃないか。この広場に目を遣るだけで十分だ。どんな女より贅沢な服を着たあのグローリア。いったいコリオラーノ大佐はあれだけの金を奥さんに注いでいるんだろうか？

「奥さんたって老嬢みたいなもんよ、ひからびて…」

「大佐の奥さんの話じゃなくて、女性一般のことだよ、おれが言いたいのは。いかがですか、わたしの主張。間違ってますか？」

「結婚した女性は家庭に入って子供を育て、夫と家族の面倒を見るようにできているんです」

「じゃあ、娼婦は金を使うようにできているっていうわけですかね？」

「思うに、歯医者にはそれほど罪がないんじゃないかなあ。つまるところ…」と言ってジョアン・フルジェンシオは議論を遮った。憤慨した隊長（カピタン）の発言が、その場に居合わせた大農場主たちに悪く取られるおそれが出てきたからである。

つまるところ、歯医者は若くて独り身で自由。女が歯医者を聖（サン）セバスティアンと思ったところで、歯医者に罪がありますか？そもそもあの人はカトリックですらなかった。ディオージェネスとともに町のプロテスタント二人組だったわけで…

「カトリックですらなかった」とマウリーシオ博士。

「しかし既婚女性と罰当たりなことをする前に、歯科医はなぜ

夫の名誉のことを考えなかったんだろうか？」と弁護士が問う。

「女の誘惑に耐えられなかったんですよ。あれは悪魔だ。人を変えちまう」

「女がこれといった理由もなく進んで男の腕の中に飛び込んだ、と考えているわけか？男は何もしなかったって？」

モラルを守るためにはいかなる妥協も許さない謹厳で攻撃的な弁護士。冗談と皮肉を愛し、いつ真面目な話しているのかさえ分からない、笑い好きでお人好しのジョアン・フルジェンシオ。ふたりの称賛すべきインテリのあいだで交わされる議論は、居合わせた人々の心を捉えて放さなかった。ナシブはこうした議論を聞くたびいつも感服する。博士（ドウトール）、隊長（カピタン）、ニョー＝ガーロ、アリ・サントスらがその場に居て議論に参加できるときにはとりわけそう思う。

そう、ジョアン・フルジェンシオには、シニャジーニャがこれといった理由なしに歯科医の腕の中に飛び込めるとは思えなかったのだ。たしかに歯科医は女に優しい言葉をかけたかもしれない。だがそれは、良い歯医者ならだれでもする最低限のサービスではないか？金属製の治療器具やモーターや恐ろしい治療椅子を前にして怯える患者に媚びを売ることくらいは。オズムンドは良い歯医者だった。イリェウスで最良の部類に属するといっても否定する者はいないだろう。そして歯医者が患者に恐怖を与える存在であることもまた否定できない。雰囲気を作り、恐怖心を和らげ、安心してもらうためにも優しい言葉をかける必要がある。

「いいか？歯医者の勤めは歯の治療であって美人に詩を聞かせることじゃない。わたしが常々言っていることだ。退廃した土地の堕落した習慣がどうやらわれわれを支配しようとしているらしい…イリェウスの社会に毒が染み込み始めたんだよ。毒というか、すべてを腐敗させる泥みたいなものが…」

「それが発展なんですよ、先生」

「その発展とやらをわたしは不道徳と呼びます…」と言って恐ろしい眼差しをバールの中へと向ける。シコ・モレーザは背筋がぞっとした。

ニョー＝ガーロの鼻にかかった声が上がる。

「先生はどの習慣についておっしゃっているんでしょうか？ダンスパーティーや映画のことか…このわたくし、もう二十年以上も当地に暮らしておりますが、イリェウスとくればキャバレーの町、思う存分飲めて、賭け事ができる町、女が買える町という認識になります…こりゃ昨日今日に始まった話じゃありませんぜ。ずっと前からこうでしたよ」

「それはもっぱら男向けの話ですね。だからって認めているわけではありませんが。ただ、家族の義務を放り出して若い娘や奥方が踊りにやってくる発展クラブとなると話は別だ。映画は堕落の学校です」

今度は隊長（カピタン）が別の質問をする。美しい女が男の言葉に心を奪わ

れ、男を教会の聖人と見まがい、ウェーブのかかった長い髪から漏れる香気についふらふらとなって、歯には詰め物をしてもらっても心にぽっかり穴を開けたまま、男の腕の中に倒れ込んできたとき、男はいったい尻込みできるものだろうか？男にも男の名誉というものがある。ここではまさにそれががかかっているのだから。歯科医は罪人であるよりむしろ犠牲者であって、非難よりも同情を受けるべきではないか。以上が隊長（カピタン）の意見だった。

「もしドナ・シニャジーニャが神から授かった肉体そのままに黒いストッキングを穿いて先生に身を投げ出してきたら、マウリーシオ先生、あなたどうします？走って逃げて助けでも呼びますか？」

この質問を聞いた者は、アラブ人ナシブも、リベイリーニョ大佐も、髪の毛がすっかり白くなったマヌエル・ダス・オンサス大佐までも、あれこれ頭を巡らしてみたが、結局答えは出せなかった。全員ドナ・シニャジーニャを知っていたからである。ぴったりとした服にその肉体を詰め込み、真面目で控えめな面もちで教会を目指し広場を横切るその姿をよく目にしていたのだ…一糸まとわぬシニャジーニャが自分の腕の中に飛び込んでくるところが目に浮かび、シコ・モレーザは給仕の仕事も忘れてため息をつく。そのおかげでナシブに突っつかれた。

「こいつ、仕事に戻れ。今どこにいると思ってんだ」

マウリーシオ博士はまるで法廷のなかにいるような気がしていた。

「去（ワデ・レトロ）れ！」

マウリーシオ博士の目には歯科医が隊長（カピタン）の言うほど無垢には見えなかった（隊長（カピタン）は歯科医を「われわれの仲間」と言わんばかりだった）。そこで隊長（カピタン）の質問に答えるために、書の書たる聖書からヨゼフの例を引き合いに出した。

「どのヨゼフだい」

「ファラオの妻に誘惑されたヨゼフです…」

「あいつは不能だったんだよ…」と言ってニョー＝ガーロは笑った。

マウリーシオ博士は収税課の役人を睨め付けた。

「そういう冗談は、今回のような重大事件のばあい馴染みませんな。あのオズムンドは決して無垢じゃありません。たしかに良い歯医者かもしれないが、イリェウスの家族にとっては危険のタネでもある…」

ここでマウリーシオ博士は、まるで裁判官と陪審員を前にでもしているように弁論を開始した。さて、歯科医は弁舌さわやか、その服装は洗練されておりました。大農場主が乗馬靴と乗馬ズボンを穿いているこの土地で、こんなに洗練された服装がいったいなぜ可能なのでしょうか？これはもうモラルの退廃からくる風俗の堕落ではありませんか？歯科医は、町に着くとたちまちアルゼンチンタンゴの名手であることが明らかになります。ああ、そし

て土曜、日曜ともなれば若い娘や娼婦、そして家庭を持つ主婦が腰を振りにやってくるあのクラブ…例の発展クラブは摩擦クラブと改名した方が良いように思いますが…あそこでは恥じらいも慎みも消え去っている。あのオズムンドという蝶はイリェウスで過ごした八ヶ月のあいだ、心も軽くひらひら飛び回っては半ダースもの町一番の独身美女に言い寄っておりました。しかし、結婚適齢期の女性が好きではなかったので、勢い望みは既婚女性ということになります。人様の食卓でごちそうになろうという魂胆です。イリェウスの街角に出現し始めたごろつきのひとりですな。いつもならマウリーシオ博士はここでひとつ咳払いをすると、いくど止められても陪審員団からわき上がる拍手に応えてなんども頭を下げるところだ。

バールのなかでも拍手はあがった。

「よく言った…」と大農場主のマヌエル・ダス・オンサスが言う。

「その通り。間違いねえな。おれたちの手本だよ。ジェズイーノはやるべきことを立派にやった」とリベイリーニョ。

「おれも反論するつもりはない。だがひとつ間違いないのは、マウリーシオ先生もその他の大勢も、みんな町の発展には反対ということだ」と隊長（カピタン）が言う。

「いつから発展が恥知らずと同義になったんだい？」

「みんなは町の発展に反対だという、良かろう。なら、キャバレーと堕落した女で溢れかえった町にいながら退廃がどうのこうのと言うのは止めてくれないか。金持ちがことごとく妾を持っている町にいながらな。映画にも反対、社交クラブにも反対、あげくの果てには家族で催す宴会まで反対だ。女は家のなかに、台所に閉じこめられていればいいってわけか…」

「家庭は貞淑な女性の砦だよ」

「わしはな、そうしたことに反対というわけじゃない」とマヌエル・ダス・オンサス大佐が釈明する。「映画だって喜劇のときなんざ気晴らしに出かけてって、結構楽しんどるよ。ま、この歳んなりゃ、踊りで足ひきずり回すってのはないけどな。でも、そのことと、亭主持ちが連れ合いを騙して赦されるかどうかは別問題だ」

「さあ、いかがですか？同じ考えの方は？」

だれひとりとして、リオ暮らしの経験もあり、イリェウスの習慣を大いに批判していた隊長（カピタン）でさえ、土地の残酷な掟に反対する勇気は持ち合わせていなかった。掟は残酷にして厳格。診療所を開こうと数年前イリェウスにやってきた医師フェリスミーノなど可哀想だった。妻リータと農学者ラウール・リーマの色恋沙汰が発覚したので、妻を愛人に押しつけたら、その後仕事が続けられなくなってしまったのである。意味のない結婚を続けてきた医師は、しめた、これで我慢ならない妻と別れられる、と思った。姦通の現場を発見され、医師の意図を忖度しそこねて逃げ出した農学者が半裸でイリェウスの通りを走り去ってゆく姿を見たときな

ど、めったにない歓びさえ感じた。フェリスミーノにしてみれば、贅沢好きで女王様気分の浪費家を愛人に丸投げするほど、洗練され、それでいてぞっとするほど恐ろしい復讐方法はなかったのである。だが、イリェウスにはユーモアのセンスが欠けていた。だれも医師の行為を理解できず、反世間的で臆病で不道徳な男だと考えた。オープンしたばかりの診療所は閉鎖に追い込まれ、救いの手を差し伸べる者とていなかった。「優牛（やさうし）」とあだ名をつけられたフェリスミーノは、この土地から永遠に立ち去るほか為す術はなかったのである。

妾の掟

その日、祭りの日のように浮かれ騒ぐバールでは、フェリスミーノ医師の悲しい事件の他にも、恋愛がらみの事件が数多く語られた。たいていが恋と裏切りと背筋も凍る復讐の物語で、ぞっとするものばかり。悶々と孤独を託つグローリアの窓辺が近くにあり、また、グローリアの女中が浜辺にたむろする人の群れを一回りしてから情報を仕入れにバールにやってきたこともあって、自然と誰かがかの有名なジュカ・ヴィアナとチキーニャの一件を話題にした。たしかに、その事件はこの日の午後起こった事件に比ぶべくもなかった。旦那衆は妻が裏切った時にしか死の報いを与えないからである。妾は死に値しないというわけだ。コリオラーノ・リベイロ大佐もそう考えていた。

囲っている――精確に言えば、家の寝室と食事と贅沢の代金を払ったり、人通りのより少ない通りに家を借りてやったりしている――女たちの不義が発覚したら、旦那衆としは、その女たちを手放して新しい女と取り替えれば事は済む。女たちが与えてくれる慰めを引き続き味わいたければ、別の女を見つければよいだけの話である。ところが実際には、すでに一度ならず、妾をめぐって発砲と死亡事件が起こっていた。例えばつい最近も黄金のピンガでは、顔にあばたのあるペルナンブーコ女をめぐって、アナニアス大佐と店員イヴォ（ヴェラクルスF.C.におけるセンターフォワードの巧みな活躍から「虎」として名が知れていたが）のあいだで撃ち合いがあったではないか。

コリオラーノ・リベイロ大佐は、密林に飛び込んでカカオを植えた最初の人々のひとりだった。大佐の農場に比肩できる農場はめったにない。三年でカカオが実を結び始める素晴らしい土地である。コリオラーノ・リベイロ大佐はラミーロ・バストス大佐の同朋で影響力も強く、イリェウスの最も豊かな土地のひとつを支配下に収めていた。服装は地味で、昔ながらの習慣を守り、質素な暮らしをしている。唯一の贅沢は妾宅に住まわせている女であった。ほとんどを農場で暮らし、快適な列車や最近流行のバスを嫌い、イリェウスにやってくるときには馬を使っていた。皮ズボン、雨に打たれてくたびれた上着、泥で汚れ年季の入った帽

子という出で立ちである。自らの農地であるカカオのプランテーションを愛し、労働者たちに指示を与え、密林に分け入ることを好んだ。農場では日曜と祝祭日にしか白米を食べないほどケチだと悪口を言う者もあったが、事実、インゲンと干し肉のかけらという労働者と同じ粗食に甘んじている。だがその一方で家族はバイーア暮らし。バラに構えた大邸宅で安楽な生活を送っていた。息子は法科学校に、娘はアスレチッククラブに通っている。ただ妻は、夫が用心棒（ジャグンソ）を率いてしきりに外出していた土地争いの時代に不安な夜を過ごすうち、早々老け込んでしまった。

「天使のように善良で、悪魔のように醜い」大佐が妻を見捨てて顧みず、めったにバイーアに行かないことをだれかが非難したとき、この妻を評してジョアン・フルジェンシオが口にした言葉である。

家族がイリェウス――現在、グローリアが住んでいる場所――に住んでいたときでさえ、妾と食事をしたり、ベッドを共にしたりする習慣は止めなかった。農場から町に出てくると、家族に会うよりもさきに妾宅に赴いて馬から降りることさえある。自分を王さまかなにかと思ってくれるあの若い盛りの原住民娘やムラータこそ、大佐にとって唯一の贅沢であり、人生の歓びだったのである。

子供たちが学齢期に達すると、大佐はすぐに家族をバイーアに引っ越させ、イリェウスの住まいを妾宅にした。友人をもてなしたり、商談をまとめたり、政治談義に花を咲かせたり、ハンモックに揺られてトウモロコシの葉巻をくゆらしたりするのもその家であった。息子が休暇でイリェウスや農場にやって来るときでさえ、妾宅に父を訪ねなければならない。自分にははした金さえケチっている男が、妾には大盤振る舞い。贅沢な身なりさせるのが大好きで、店では財布の口を緩めっぱなしであった。

グローリアの前にも次から次へ多くの女が大佐の寵愛を受けていたが、大佐との関係は概ね一定期間続いていた。大佐の妾は家にたったひとりで閉じこめられ、めったに外出できない。友人関係も訪問も禁じられていた。「嫉妬の怪物」と評する者もあった。

「他人のために女に金を払うのが嫌でね…」この件について訊かれると大佐はそう説明する。

ほとんどの場合、女の方が大佐を捨ててきた。贅沢な食事と服を与えられても、囚われの暮らしにうんざりしてしまうのである。娼家に転がり込む女もいたし、農場に戻る女もあった。行商人に連れられてバイーアに行った女もいる。とはいえ、時には大佐の方が飽きて、新しい肉体を求めることもあった。たいてい自分の農園か近くの村落で感じの良いムラータを見つけ、前の女はお払い箱にする。そういう場合、大佐は女に手厚い補償をした。三年以上一緒に暮らしてきたある女など、サポ通りの商店を譲り受けている。大佐は時折女を訪ね、おしゃべりに耳を傾けながら、商店全体の景気を知ろうとする。コリオラーノ大佐の妾たちにはい

ろいろな情報が集まってくるからだった。

とても若くおずおずしたシキーニャとかいう女の子も、そんな妾のひとりだった。まだ十六歳の少女で、あらゆることに怯えていた。ほっそりとした体。顔からこぼれ落ちそうな優しい目。少女は大佐の目に留まり、人気の少ない通りの家に農場から連れてこられた。大佐が町に出てきたとき栗毛の馬をつないでおくのはこの家だった。当時大佐は五十台に入っていたが、シキーニャがあまりにおずおずとしたはにかみ屋だったので、大佐自ら靴や布地や香水瓶を買いに行かければならなかった。シキーニャはすっかり打ち解けた親密なひとときでも大佐にたいする敬意を忘れず、「旦那さま」とか「大佐」とか呼んでいたが、そう呼ばれたコリオラーノの方はでれでれだったという。

聖体行列の日、休暇中の学生ジュカ・ヴィアナがシキーニャを見初めた。ジュカはシキーニャの家の前のうす暗い通りをうろつき始めた。友人たちは危ないから止めろと説得にかかった。コリオラーノ大佐の女にちょっかいを出そうとするやつなんかいない。やつは半端じゃない。法科学校の二年生で豪傑をもって自任するジュカは肩をそびやかした。学生のたくましい髭、洗練された服、恋の予感を前にして、シキーニャの臆病も雲散霧消する。大農場主がいないときはほとんどいつも閉めていた窓を開け始める。ある晩家の扉が開き、ジュカはついにシキーニャと同衾を果たした。大佐と同列になったのだ。ただ、同列といっても資金もなければ責任もない相棒が利益のもっとも美味しいところをいただいているようなものだった。その灼けるような情熱は、やがて町全体の知るところとなり、あれこれ取り沙汰されるようになった。

この恋物語はそのあらゆる細部にいたるまでいまだに語り継がれ、モデーロ文具店で、老嬢の会話で、バックギャモンの盤の前で繰り返し話題になっている。ジュカ・ヴィアナは羞恥心もどこへやら、コリオラーノ大佐が家賃を払う家に昼日中から繰り返し潜り込んだ。おずおずとしたシキーニャも今や大胆な愛人。夜ともなるとジュカと手に手を取って部屋を抜け出し、月明かりの下、人気ない浜辺で愛を交わすのだった。十六歳の少女と二十歳そこそこの青年。ふたりは、まるで田園詩によく描かれる若い逃亡者のようだった。

大佐の手下たちがやってきたのは日も暮れかかったころだった。山羊顔トイーニョが悪名高いバールでこれみよがしにピンガをひっかけ、ひとしきり凄んでみせたあと、シキーニャの住む家へと向かう。大佐が家賃を払う家のベッドで恋人たちは愛の戯れの最中だった。安心しきって恋の炎を存分に燃やし、幸せそうに顔を見つめては微笑みあっている。ため息が切れると、「ああ、あなた！」というううめくようなシキーニャの声が近隣にも聞こえていた。大佐の手下どもは裏庭から入っていった。そのとき近隣ばかりか遠くの家にまで聞こえてきたのは、それまでと違った物音だった。叫び声で通りじゅうの家が目を覚まし、いったい何事か

とシキーニャの家の前に集まる。ふたりの若者が喰らったパンチは相当強烈だったらしい。手下どもはふたりの髪の毛を切ったのである。シキーニャは三つ編みを、ジュカ・ヴィアナは波打つブロンドの長髪を切られた。そして二人は、大佐からの命令として、その晩即刻イリェウスから立ち去り、二度とこの地を踏まぬよう言い渡された。

ジュカ・ヴィアナはその後ジェキエの検事になったが、学校を卒業した後もイリェウスには戻っていない。シキーニャの消息については不明である。

この話を知りながら、大佐の招待がないのに妾宅の敷居をまたごうとする者がはたしているだろうか？ましてや、コリオラーノが囲ってきた情婦のうちでもいちばん欲望をそそり、いちばん華やかなグローリアの家の重い扉を開けようとする者など。大佐は老いた。その政治力にも往時の勢いはない。だが、ジュカ・ヴィアナとシキーニャに下された懲罰は記憶に刻み込まれているし、大佐本人も、必要とあらばその記憶を取り戻すことだろう。一方、トニコ・バストスの登記所で起こった事件といえば最近のできごとである。

感じの良い田舎者

目の下には隈、銀髪の混じったロマンチックな髪、青いジャケットと白いズボン、ピカピカに磨き上げられた靴。町でもとりわけ洗練され、ダンディの名に恥じない男トニコ・バストスが磊落な足取りでバールに入ってきた。ちょうど会話のなかに名前が出たところだった。話の輪に気まずい沈黙が流れる。怪訝そうな顔でトニコが訊いた。

「何の話だ？おれの名前が聞こえたが」

「女の話だよ。他になにがある」とジョアン・フルジェンシオ。「女の話をしてたら、あんたの名前が出てきたってわけだ。そりゃ避けられんだろう…」

トニコは微笑むと、椅子を引き寄せる。抗しがたき征服者という名声こそ、トニコの生きるよすがである。兄のアルフレードは医者としてイリェウスの診療所で子供たちを診察し、代議士としてバイーアの議会で熱弁を揮っているというのに、トニコの方は町を彷徨き、娼家通いに明け暮れ、農場主たちの妾を寝取り回っていた。町に上陸した新しい女が美人だとわかるとすぐに会いにでかけ、スカートにまとわりついては優しい言葉で大胆に言い寄る。たしかに成功も収めていたが、武勇伝になるとその成功を何倍にも膨らましていた。ナシブの友人で、概ね店内が閑散とする昼寝時にバールにやってきてはナシブを起こし、色恋沙汰やものにした女のこと、自分をめぐって女同士が燃やす嫉妬などについて話してゆくのがこの男だった。イリェウス広しといえども、ナシブがこれほど感嘆置くあたわざる人物はこの男しかいない。

トニコ・バストスの評価は二分されていた。いくぶんエゴイストで自慢癖は鼻につくものの、話していて気持ちの良い善人で、いずれにせよ人畜無害だと考える者がいれば、愚かなうぬぼれで、無能にして臆病、怠惰にして尊大と考える者がいた。だが、人好きがする男というで点で両者の評価は一致していた。満ち足りた男のあの微笑み。魅力的なあの会話。トニコのことはあの隊長（カピタン）さえ認めずにはいられなかった。

「気持ちの良いろくでなし、魅力的なならず者といったところだな」

トニコ・バストスは技術の勉強にリオの大学へ行ったが、七年間の履修義務のうち三年も終えることができなかった。バイーアにおける息子の醜聞にうんざりして父親のラミーロ大佐が送り込んだ大学であった。送金に疲れ、トニコにはアルフレードのように学位を取ってきちんとした職につける見込みがないことを知った大佐は、息子をイリェウスに呼び戻し、町いちばんの登記所に職をあてがうと、町いちばんの金満花嫁と結婚させた。

土地争い時代の終盤に亡くなった大農場主と遺されたやもめのあいだに授かったひとり娘ドナ・オルガはたしかに裕福だったが、とりわけやっかいな女だった。トニコは父親から勇気を受け継いでおらず、娼家通りでもめ事に巻き込まれたときなど真っ青になってどもっていたところを人に見られているが、それが恐妻家の理由ではなかった。トニコが恐妻家だった理由は、おそらく、一身に尊敬を浴びる老ラミーロの評価に醜聞で傷を付けることを恐れたからである。というのも、いつか醜聞をばらすからね、とドナ・オルガは毎日のようにトニコを脅迫していたのだ。毒舌家のドナ・オルガにしてみれば、女は全員トニコの尻を追いかけているということになる。太った奥方が夫に浴びせる脅迫とお説教が毎日のようにご近所まで聞こえていた。

「あんたがもしだれかと寝てるって分かったら…」

この家では家政婦が長続きしなかった。ドナ・オルガがなにかにつけて家政婦を疑い、人の夫を欲しがっていると思い込んで、つまらないことを口実に暇を出してしまうからである。女学校の生徒も、発展クラブで踊る奥さんたちも同じような疑いの目で眺めていた。その嫉妬ぶりはすでにイリェウスの伝説になっていた。嫉妬も、育ちの悪さも、下品なふるまいも、どでかい失態も、すべてが。

トニコとしては妻にアバンチュールのことを知られてはならなかったし、夜、「政治がらみの話があって出てくる」などともっともらしいことを言って出ていったとき娼家にいるのではないか、と疑いを持たれてはならなかった。もし真実が知れてしまったら一巻の終わりだ。しかしトニコは口が巧みで、妻をなだめすかして嫉妬の炎を和らげる手だてには事欠かなかった。夕食後一緒に広場をひとまわりしてバール・ヴェズーヴィオでシャーベットを奢ってやったり、映画に連れてってやったりする。こうしたこと

の用意周到さにかけてトニコの右に出る男はいなかった。

「見てみろよあいつ、家の象連れてまじめに歩いてるぜ…」トニコの散歩を目にした者の言である。それほどまじめそうな顔をしたトニコの横では、オルガの肥満がいまにも服を引き裂きそうなありさま。

ところがそのすぐ後、登記事務所もあるドス・パラレレピーペドス通りの家にオルガを連れ帰り、「友だちと少し政治談義でもしてくるわ」と言って再び家を出てくるとトニコはもう別人になっていた。キャバレーへ行って踊り、女の家で夕食を取る。娼家ではひっぱりだこで、トニコをめぐって女たちが取っ組み合い、罵り合い、髪の毛までひっぱり合うのだった。

「あれじゃあいつかは家庭崩壊だ…」と囁く者もあった。「ドナ・オルガに知れたら、一巻の終わりだからな」

実際、危機はいくどかやってきた。ところがトニコ・バストスはそのたびごとに奥方を嘘の網に丸め込んで、嫌疑を和らげるのだった。抗しがたい魅力を持った男、町一番の征服者という地位を保ち続けるのは、なかなか容易なことではない。

「今日の事件のこと、あんたどう思うよ?」とニョー＝ガーロが尋ねる。

「ぞっとするじゃねえか。あんなことになるとはなあ…」

みんなが黒いストッキングの話をトニコにしてやると、トニコはなるほどという合図を目で送る。一同は似たような事件を記憶の中からまた引っ張り出してきた。ファブリシオ大佐はたしか短刀で奥さんを殺し、愛人の方は、用心棒に頼んで、フリーメーソンの集会からの帰宅途中を撃わせたんだったよな。血と復讐の伝統。それは残酷な習慣であり、非情の掟であった。

アラブ人ナシブも仕事そっちのけで――ドス・レイス姉妹の甘いものと辛いつまみはすでに品切れになっていた――会話に首を突っ込んでいた。例によって、両親の故郷シリアはもっと恐ろしい、と言うためである。テーブルの近くに突っ立ったまま、巨体が上から一同を見下ろしている。他のテーブルの客もだまったままじっと耳を傾けていた。

「親父の故郷なんかもっとひどいんですよ…あそこじゃ男の名誉は神聖不可侵、冗談にもちょっかいなんか出せない。もしそんなことしたら、そのときゃ…」

「そのときゃ、どうなる?アラブ人」

ナシブは聞き耳をそばだてている常連客と友人たちをゆっくりと睨め回し、ドラマチックな雰囲気を醸しておいて、その大きな頭を前にかがめた。

「姦通を犯した妻は最後に短刀でゆっくり八つ裂きにされます。バラバラになるまで…」

「ほんとにバラバラなのか?」とニョー＝ガーロが鼻にかかった声で訊く。

ナシブはまん丸の顔と無邪気にふくらんだ頬を近づけると、人

殺しの雰囲気を醸して、髭の先を撫でつける。

「そうなんですよ、ニョーさん。あそこじゃ、恥知らずの女に二三発弾ぶち込んで殺すだけじゃ満足しない。男が絶対の土地柄です。姦通妻のばらし方もことはわけが違う。腐れ女はバラバラにされる。乳首から始めて…」

「乳首からだと？怖いのお」とあのリベイリーニョ大佐がガクガクする。

「残酷なもんですか！夫を裏切った女なんざそれでも足りないくらいですよ。おれがもし結婚してて妻に裏切られたら、シリアの掟を守りますね。妻はミンチみたいにズタズタだ。おれならそれくらいはしますよ」

「で、間男の方は？」と好奇心をいたく刺激されたマウリーシオ・カイレス博士が訊く。

「他人の名誉を汚した男ですか？」ナシブはじっとしたまま暗い顔で片手を上げると、残念そうな笑みを浮かべる。「ああ、お可哀想に…たくさんの男たち、それもシリアのごつい山男たちに抑えつけられて、ズボンを脱がされるわけです…すると夫がよく研いだ剃刀の刃を手にして…」と状況を説明しながら素早い動きで手を振り下ろす。

「うわ、止めてくれ！」

「いや、こいつの言う通りですよ、先生。去勢されちまうんです」

ジョアン・フルジェンシオが顎に手を当てて言う。「それにしても奇妙な風習だよなあ、ナシブ。結局、その土地土地で独特の風習があるんだな」

「気違い沙汰だ。トルコ人がそんなにすぐにカッカするとなりゃ、あそこはさぞかし宦官だらけだろう…」と隊長（カピタン）。

「それに、あいつらは人のものを盗むために他人の家に入りこむなんてこと、なんでわざわざするんだ？家の名誉だってかかっているのに」マウリーシオがナシブに賛意を込めてそう言った。

アラブ人ナシブは得意そうに微笑み、常連客たちを慈しむような目で見渡した。ナシブはバールの主人というこの仕事が好きだった。こうしてみんなでだべったり、議論したり、バックギャモンたチェスをやったりポーカーをやったりすることが。

「またひと勝負しないか…」と隊長（カピタン）が誘った。

「今日はだめですよ。客がいっぱいだから。それにこれからすぐ料理女を見つけに行かなくちゃならないんで」

博士（ドウトール）が誘いに乗った。隊長（カピタン）とバックギャモン台の前に座る。ニョー＝ガーロが付き添って、勝った方とプレイするらしい。駒を置くあいだ博士（ドウトール）が話す。

「アーヴィラ家にも似たような事件があった…アーヴィラ家のある男が農場管理人の妻とできてしまった。スキャンダルになって、夫に発覚した…」

「で、その夫はあんたの縁者を去勢したってわけか？」

「だれが去勢などと言った。夫は銃を手に現れた。ところが曾祖父の方が一瞬早く引き金を…」

客の集団は少しずつほぐれていった。夕食の時間が近づいたのである。午前中と同じように、映画館の方からディオージェネスと芸人の一行が現れた。トニコ・バストスが詳細な情報を得ようとする。

「あの女、ムンディーニョ専用か？」

ムンディーニョのことならいささか自信のある隊長（カピタン）がバックギャモン台から答える。

「いや。女とは関係ない。女は小鳥のように自由だ。好きにすればいい…」

トニコはヒューと歯笛をならす。芸人の一行が挨拶をした。アナベラが微笑んでいる。

「町を代表してちょいと挨拶でもしてくるわ…」

「町を巻き込むんじゃないぞ、ろくでなし」

「夫の剃刀には気を付けてな…」とニョー＝ガーロが笑う。

「わしもつき合うよ」とリベイリーニョ大佐。

しかし、ちょうど腰を上げようとしたところにアマンシオ・レアール大佐が現れ、一同の関心はすっかりそちらに移ってしまった。二人の殺害後ジェズイーノがアマンシオ・レアール大佐の家に身を寄せていることはみんな知っていた。復讐心を満足させたあと、現行犯逮捕を避けるため、ジェズイーノ大佐はその場をそっと離れた。市（いち）でごったがえす町をゆっくり横切ると、かつて土地争いの時代を共に戦った友人であり仲間であるアマンシオ・レアール大佐の家へ赴き、明日出頭すると判事に伝えてくれるよう頼んだのであった。いましばらくはそっとしておいて欲しい。こういう事件のときには、裁きが出るまでのあいだ自由にさせてもらうのがしきたりだから、と。アマンシオ大佐は目で誰かを探し、マウリーシオ博士に近づいてゆく。

「先生、ちょっとお話しよろしいですか？」

弁護士は席を立ち、二人はバールの奥へと行った。大農場主が何か言い、マウリーシオがしきりにうなずいている。マウリーシオは帽子を取りに戻ってくると言った。

「失礼させていただきます。用事ができたもんで」

アマンシオ大佐も挨拶する。

「みなさんがた、ごめんなすって」

二人はアダミ大佐通りに入っていった。アマンシオは小学校広場に住んでいる。人一倍好奇心の強い客が席を立って、通りを上って行く二人を目で追った。二人は葬列か聖体行列にでも随行しているように神妙だ。

「マウリーシオ先生を弁護士につけるつもりだ」

「大船に乗ったようなもんさ。裁判では旧約聖書と新約聖書をご拝聴ですな」

「いずれにせよ…弁護士なんかいらないが。無罪は間違いない

んだから」

隊長（カピタン）がバックギャモンの駒を手に振り返り、怒りをぶちまける。

「あのマウリーシオという野郎、偽善の塊だ。恥知らずの男やもめめ」

「あいつの手から逃げおおせる黒人女はいないって噂だよ」

「聞いたことがある」

「いや、ひとりだけいるよ、ウニャンの丘に。ほとんど毎晩あいつの家に行ってるけどな」

映画館の出入り口には王子（プリンシペ）とアナベラがふたたび姿を現した。ディオージェネスが悲しげな顔で連れ添っている。女は手に本を一冊持っていた。

「こっちに来るぞ」とリベイリーニョ大佐が呟く。

アナベラが近づくと全員が立ち上がり、しきりに席を勧める。本というのは革装のアルバムだった。これが客の間に次々回される。踊り子について書かれた新聞記事の切り抜きや講評の書き写しが載っていた。

「デビュー公演が終わったらみなさんのご感想を伺いたいんです」アナベラは立ったまま。席を勧められても座ろうとはしなかった。もうホテルに帰らなければならないので、と言ってリベイリーニョ大佐の椅子にもたれている。

キャバレーのデビューがその晩、王子（プリンシペ）と一緒に映画館の舞台に立って魔術の出し物をするのが翌日だった。王子（プリンシペ）は催眠術もできるし、テレパシーでも巨匠の腕前を誇る。いましがたその力量をディオージェネスに証明してきたところだった。こんなものいままで一度も見たことがない、映画館主もそう認めざるを得なかった。教会前の小広場では、シニャジーニャとオズムンドの殺人ですでに興奮ぎみの老嬢たちがこの様子をじっと見ながら女を指さしている。

「男たちをいちばん狂わせるタイプよ」

アナベラが優しい声で訊く。

「ここでなにか事件があったって聞きましたけど？」

「そうなんですよ。大農場主が奥さんとその愛人を殺しましてね」

「かわいそうに…」とアナベラは同情した。その日の午後は事件にかんする感想が山ほど語られたが、シニャジーニャの悲運を哀れむ言葉はついにこの一言だけだった。

「封建的な風習でして…」と踊り子の方に向き直ってトニコ・バストスが言う。「われわれはまだ前世紀に生きているんです」

王子（プリンシペ）はうなずきながらばかにしたような薄笑いを浮かべ、純粋なピンガを一口飲み込んだ。混ぜものをしたピンガが嫌いだったのだ。ジョアン・フルジェンシオは、アナベラの仕事を称賛する記事が載ったアルバムを返す。芸人カップルは暇乞いをした。デビュー前に少し休んでおきたいので、と女が言う。

「みなさん、今晩バタクランでお待ちしております」

「ぜったい行くよ」

老嬢たちは教会前の小広場に陣取り、顔を顰めながらしきりに十字を切っていた。堕落した土地だわ、このイリェウスは…メルク・タヴァレス大佐の門前ではジョズエー先生がマルヴィーナとおしゃべりをしている。グローリアは孤独な窓でため息をついていた。イリェウスが暮れ始める。バールの客もまばらになりだした。リベイリーニョ大佐も芸人たちを追って外に出た。

トニコ・バストスがやってきてレジ近くのカウンターにもたれかかった。ナシブは上着を羽織り、シコ・モレーザとビコ＝フィーノに指示を出す。トニコは店の奥をぼーっと眺めている。グラスはほとんど空だ。

「踊り子のこと考えてるのか？あいつは上物だ、みんな狙ってるぞ…ものすごい争奪戦になるだろうな。リベイリーニョがもう目をつけてるし」

「シニャジーニャのことを考えてんだ。恐ろしいと思わないかい、ナシブさん」

「歯医者との関係はさんざん聞かされたよ。正直言って、最初は信じられなかったけどな。あんなにまじめな女が…」

「あんたはお人好しというか」と言ってトニコは自分でグラスに酒を満たす。勝手知ったるバールだ。付けで飲んで、月末払い。

「ひょっとするとあの女、もっとずっと酷かったのかもしれないよ」

吃驚したナシブは、声をひそめて言った。

「ひょっとして、あんたも？」

そうだとはっきり言う勇気がトニコにはなかった。そんな雰囲気を匂わすだけ。手振りでそれを伝える。

「あんなにまじめそうな面して…」ナシブはワルぶった口調になって続ける。「ちょいと化けの皮剥いでみりゃ、下からうじゃうじゃ…ってか？」

「そんなに悪く言うなよ、アラブ人。もう仏さんだ。そっとしといてやろうじゃないか」

ナシブは口を開け何か言おうとした。だが、出てきたのはため息だけだった。ということは、歯医者が最初の相手じゃなかったのか…髪に白いメッシュなんかしやがって、こいつ。この無類の女たらしトニコもあの女を抱いてたってことか、あの肉体に触れてたんだ。教会に行くシニャジーニャがバールの前を通り過ぎるとき、ナシブは、尊敬と貪婪の入り交じった目でいくど見送ったことだろう。

「だからおれは結婚もしないし、所帯持ちの女には手をださないんだよ」

「同じく」とトニコ。

「嫌みだねえ…」

ナシブは通りに出た。

「料理女がいるかどうかちょっと見てくるわ。北東部移民が

やってきたところだから。使える女が見つからないともかぎらないし」

グローリアの窓の下ではちびくろトゥイースカがニュースを話して聞かせている。バールで仕入れた事件の詳細だ。お礼にちびくろは縮れ毛を撫でてもらい、ほっぺたをつまんでもらっている。いましがたバックギャモンで勝った隊長（カピタン）がそれを見て言った。

「ちびくろのやつ、幸せだなあ」

寂しい夕暮れ時

寂しい夕暮れ時、つばの広い帽子を被り、リボルバーをベルトにさして駅に向かう道を歩きながら、ナシブはシニャジーニャのことを思い出していた。家々から食器を並べる音や笑い声、話し声が聞こえてくる。きっとシニャジーニャとオズムンドの話をしているのだろう。ナシブは優しい気持ちでシニャジーニャのことを思い出していた。心の底では、傲慢で嫌らしいあのゲス男ジェズイーノ・メンドンサなんか法廷で裁かれればいいのに、と思う。もちろんそんなことはありえない。でもそれくらいあいつには当然の報いだ。このイリェウスの風習の野蛮さときたら…

シリアは恐ろしい土地で、女はバラバラにされ、男は去勢されるという話はナシブの法螺で、すべて口から出任せだった。慈しんでもくれなければ、優しい言葉をかけてくれない粗暴な年老いた夫を騙したくらいで、若くて美しい妻が死ななければならないなんて、ナシブに考えられただろうか？今や故郷となったこのイリェウスこそ、実は、文明果つる地だった。発展が人の口端に上り、お金が自由に動き回り、カカオが道と村落を拓き、町の相貌を変えてはいた。だが、いにしえの昔から続くこの恐ろしい風習は失われていなかった。ナシブにはこうしたことを声高に話す勇気がなかった。それができるのはムンディーニョ・ファルカンだけだ。しかし、夜のとばりが降りようとする物悲しい時間になると、ナシブもこうしたことを考え、悲哀に襲われて、どっと疲労を感じるのだった。

そんなこんなでナシブは結婚をしていなかった。妻に不貞を働かれるのも、人を殺し、他人の血を流し、女の胸に弾を五発ぶち込むのも嫌だった。それでも、結婚できたら楽しかろう…とは思う。バールを終えて夜中に帰宅すると出迎えてくれる女の存在に満ちた家庭が、優しい愛撫や甘い言葉が、無性に恋しくなる。時々そんな思いに捕らわれるが、「奴隷市場」に向かって歩いている今もそうだった。ナシブは決して血眼になって花嫁を探すタイプの男ではない。そもそも、一日中バールに居るナシブにそんな時間などなかった。女性関係は、キャバレーで出会った水商売の女や、あちこちで知り合った女性だけ。一定期間続きはする。ただしそれはたんなるアヴァンチュールであって、そこに愛情はなかった。若いころには恋の二つや三つはあった。だが、そのこ

ろはまだ結婚など考えていなかった。ただ埒のあかないおしゃべりしたり、映画館で待ち合わせて、昼間の上映中におずおずとキスを交わしたりするくらいであった。

今では恋のための時間など残っていない。一日中バールにかかりきりだったからである。ナシブはお金が欲しかった。金持ちになって土地を買い、カカオを植えたかった。イリェウスに暮らすすべての人と同じように、カカオ農場を持つことが夢だった。黄金のように黄色く、そしてほんとうに黄金の価値をもつ実を結ぶ木。その木が育つ土地を持つことが夢だ。その夢がかなったとき、きっと結婚できるだろう。それまでは広場を行き交う美人や、手を出すことのできない窓辺のグローリアをいつまでも眺めたり、リゾレータのような新顔を見つけては同衾するだけで満足しなければならない。

昨晩出会ったセルジペ州出身の娘リゾレータを思い出して、ナシブは微笑んだ。目は少しやぶにらみだけど、床上手な女だった。さて、今晩もまた会いに行くか、どうするか。あの娘はきっとキャバレーで待っててくれるだろう。だけどこうおれの気がふさいでて疲れてちゃあ。ナシブはふたたびシニャジーニャのことを考えた。バールの前に立って、広場を横切り教会に入ってゆくシニャジーニャの姿をいくども眺めたものだ。大農場主の財産を羨望するような眼差しで追いながら、実際にはできない無分別な行動を頭のなかで思い描いては他人の名誉を汚してみる。おれは詩のように粋な言葉を口にする学もなければ、波打つ長い髪も持っていない。発展クラブでアルゼンチンタンゴを踊る能力もない。でも、もしこうした条件が揃っていたら、おれだって胸に銃弾を受けて、血の海に倒れていたかもしれないんだ。黒いストッキングを穿いた女の傍らで。

ナシブは夕暮れの道を歩いていった。ときおりかかる「こんばんは」という声に返事こそするが、心はここにあらずだった。銃弾で穴の開いた男の胸。弾が打ち抜いた愛人の白い乳房。殺人現場が脳裏に浮かぶ。二つの遺体が血の海に並んで横たわっている。ガーターはたぶんしていただろう。いや、してなかったかもしれない。ガーターなしの方がエレガントだな。止めるものもなく白い肉体をぴったり包むメッシュの薄いストッキング。さぞかしきれいだろう。きれいで、悲しくて。ナシブはため息をついた。シニャジーニャの横にいる男はすでに歯科医のオズムンドではない。見えているのは自分自身の姿だ。ただし太鼓腹ならぬすらっと痩せた自分が殺され、女の傍らに横たわっている。その女の美しさ！胸は銃弾で打ち抜かれている。ナシブはまたため息をついた。ナシブはロマンチックな男だった。みんなに語って聞かせた恐ろしい話など他愛もないものだった。ベルトに差したリボルバーにもさしたる意味はない。イリェウスの男ならだれもがしている土地の習慣に過ぎない…ナシブが愛して止まないのは、むしろうまいものを食べることだった。辛みの効いた旨い料理を食べ、よく

冷えたビールを飲み、充実したバックギャモンの試合をする。土地を買うつもりで銀行に預けてあるバールの上がりまで擦ってしまうんじゃないかと不安に駆られながら、空が白むまでポーカーのカードをおそるおそるめくる。そんなことが好きだった。売り上げを増やすために酒に混ぜものをする。月末の付け払いのときに巧妙に数千レイスを水増しする。友人と連れ立ってキャバレーに行く。そして一日の締めには、出会ってから数日しかたっていないリゾレータのような女と抱き合って寝る。そんなことが好きだった。そして小麦色の肌の娘も、おしゃべりすることも、笑うことも。

ナシブはどのように料理女を雇ったか、あるいは恋への曲がりくねった道のり

露台を分解し、商品を片づけている最中の市を後にして、ナシブは駅舎を通り抜けた。征服が丘が始まる手前に奴隷市場がある。奴隷市場とは、北東部移民が仕事を待ってキャンプを張る場所に、かなり以前、誰かが名付けた通称である。この通称が広く人口に膾炙してからは、他の名前で呼ぶ者はいなかった。干魃を逃れてやってきたセルタン地帯の住民、とりわけ、カカオに惹かれ家と土地を捨ててやってきた最も貧しい人々が折り重なるように溜まっている。

大農場主たちは鞭で長靴を叩きながら、到着したばかりの移民を吟味していた。セルタン地帯民は働き者だというもっぱらの評判だったからである。

そこには、飢えと渇きに苦しむ男女が待っていた。遠くにはあらゆるものが揃う市が見える。彼らの胸には希望が満ちあふれていた。道、半乾燥地帯、飢え、蛇、風土病、疲労、すべてを克服してここまで来たのがこの男女たちだった。肥沃な土地に辿り着き、これでやっと悲惨な日々は終わったと感じていた。ぞっとするような話や、暴力や死にかんする話も聞いていたが、カカオが値上がりしていることも、自分たちのように苦しんでいたセルタン地帯の住民が今ではピカピカの長靴を履き、銀の握りがついた鞭を手に闊歩していることも知っていたからである。かつての貧しい移民が、今やカカオ農場の主人なのだ。

市ではだれかが喧嘩をしていた。人が走り、最後の夕日を照り返して剃刀がきらりと光る。叫び声がここまで聞こえてきた。市の終わりはいつでもこうだった。酔っぱらいとひと騒動である。移民のなかからアコーディオンの奏でるメロディーが聞こえてきた。女がひとり歌っている。

メルク・タヴァレス大佐はアコーディオンを弾いている男に合図を送った。音楽が止む。

「結婚は？」

「してませんです、だんな」

「うちで働いてみる気はないかね？」と言って、すでに選び出した男たちの方を指さした。「楽器の巧いやつってのは農場にいくらいても構わんからな。祭りの日には花を添えてくれるし」と言ってつい頷きたくなうるような微笑みを浮かべる。よい労働者を集めることにかけてメルク・タヴァレス大佐の右に出る者はいないという噂だった。大佐の農場はカショエイラ・ド・スルにあって、駅のブリッジ脇には大きな丸木船が大佐を待っていた。

「雇われですか、請負ですか？」

「どちらでも。開墾しなければならない土地がたくさんあってね。請負が必要なんだが」セルタン地帯から来た移民は、新しいカカオのプランテーションを請負でやりたがる。請負ならリスクもあるが大金を稼げる可能性もあるからだ。

「やらせていただきます、だんな」

メルクはナシブに気がついた。冗談を言う。

「ナシブ、お前もいよいよ大農場主（ファゼンデイロ）か。作男でも見つけに来たか？」

「大佐…わたしはただ料理女を探しているだけですって。今までのが今朝いなくなっちまったもんですから…」

「例の事件みたいじゃないか。ジェズイーノの…」

「ええまあ、似たようなもんです。突然ですからね…」

「アマンシオの家でやつに連帯を表明してきた。ただ、おれは今日中に農場へ帰らにゃならん。男たちを連れて…このお天道様だ。収穫も多いからな」と言って選んできた男たちを指さした。全員大佐の傍らに集まっている。「こいつらセルタン地帯から来た移民はよく働くぞ。ここの人間とは比べ者にならんよ。イリェウス人ときた日にゃ、額に汗して働くのが大嫌いだからな。好きなことといやぁ、町をふらふらすることだけで…」

他の大農場主たちも移民集団の間を歩き回っている。メルクは続けた。

「そこへゆくとセルタン移民（セルタネージョ）は努力を惜しまんぞ。ひたすら金を稼ごうって構えだ。朝の五時にはもう野良に出て、日がとっぷり暮れるまで鍬を休めない。インゲンと干し肉にコーヒーとピンガを与えておけば満足しとるし。おれに言わせりゃセルタン移民以上に価値のある労働者はいない」とその筋の権威は請け合う。

ナシブは大佐に雇われた男たちを吟味し、その選択に納得した。長靴を履き、畑のために男たちと契約を結ぶことができる地主が羨ましかった。自分が探している人間ときたら、聖セバスティアン坂の小さな自宅を掃除洗濯でき、バールと自分の料理を作れる女ひとり。若くなくてもまじめであれば良い、というささやかな条件だ。そんな女を見つけるのでさえ、一日中足を棒にしてあちこち歩き回らなければならないありさまである。

「このあたりで料理女は難しいな…」とメルクが言う。

ナシブはセルタン移民のなかから無意識にフィロメーナに似た女を探していた。年齢も、ぶつくさ言う癖も似た女を。メルク大

佐はナシブの手を握った。丸木船がすでに人を乗せて待っている。
「ジェズイーノの行いは正しかった。あれは名誉の男だ…」
ナシブもニュースを提供した。
「港口を調査しに技師が来るという話です。」
「おれも聞いた。この機会を逃したら、あの港口はもうそれっきりだ」
ナシブはその場を離れると、セルタン移民のあいだを回り始めた。男は老いも若きも希望に目を輝かせてナシブを見る。女は少なかった。しかもほとんどが子持ち。スカートに子供がしがみついている。ついに五十歳くらいの女性がナシブの目に止まった。大きくてがっしりしていて、聞けば夫もいないという。
「途中に残してきたです、だんなさま」
「料理はできるか?」
「本格的なのはちょっと」
ああ、いったいぜんたいどこに行けば料理女が見つかるのだろう。いつまでもドス・レイス姉妹に大枚をはたくわけにはゆかないし。それに、店が混む日には。今日は殺人、明日は葬式だ…それにもっと悪いことには、ホテル・コエーリョで昼飯と晩飯を食わなきゃならない。あの味も素っ気もない餌を。出前代を払ってもアルカジュから取り寄せるしかないか。ナシブの足は老女の前で止まった。だが、あまりにも歳を取っていて、家につくころには死んでしまいそうだった。杖の上で二重(ふたえ)に折れ曲がっている。どうやってイリェウスまで歩いて来られたのだろう?ナシブは見ていて辛くなった。それほどまで年老いてひからびている。まるで屑のようだ。この世にはなんという不幸が存在するんだろう…
そのとき別の女が現れた。ぼろ布をまとい、泥垢にまみれている。泥垢があまりに厚くて目鼻立ちもうかがえず、年齢も確認できない。髪の毛はくしゃくしゃで埃にまみれ、そのうえ裸足である。ひょうたんに水を入れて持ってくると、老女の震える手に持たせた。老女は貪るように水をすする。
「神様仏様、ありがたや…」
「おばあさん、そんな大げさな…」若い女の声だった。おそらくナシブが到着したとき歌っていた女だろう。
メルク大佐と男たちが列車の向こうに去ってゆく。アコーディオンの男は一瞬演奏を止めると別れの合図を送ってきた。女も腕を上げてひとしきり手を振ると、老女の方に向き直って空のひょうたんを受け取った。女が行こうとしたときナシブが声を掛けた。腰の曲がった老女がまだ気になっていたのだ。
「あんたのおばあさんかい?」
「ちがいます、旦那さん」と言って女は立ち止まり、笑う。ナシブはそのときになって初めて女がまだほんの若い娘だということに気づいた。笑っているとき目がきらきらと輝いているからだ。
「ここへ来る途中で出会ったの、あたしたち。四日前のことだけど」

「あたしたちって、だれ？」
「あそこの…」と言って一集団を指さし、また笑った。明るく、透明で、はっとするような笑い声だ。「あたしたち一緒に出発したんです。同じ場所から。干魃で、生きていた動物もみんな死んじまって、水だったところもみんな乾いて、木も乾いてひょろひょろになっちゃった。道々で違う人たちに出会って。みんな逃げてきたんです」
「あんたはあの人たちの親戚かい？」
「ちがいます。だってあたし独りだもん。おじさんが一緒だったけど、ジェレモアボに着く前に魂だけあの世にいっちゃった。肺結核とかいうらしいけど…」と言って、まるで可笑しい話でもしているように笑った。
「さっき歌うたってたの、きみじゃない？」
「はい、あたしです。アコーディオン弾ける人がいたんだけど、さっき農場の請負になっちゃった。ここで金持ちになるだって。わたしたち歌うたって、悪いこと忘れるんです…」
ひょうたんを握った手を腰に当てている。ナシブは泥垢の下がどうなっているのかよく観察した。元気で健康そうだ。
「きみはなにができる？」
「なんでも少しは」
「洗濯なんかどう？」
「できない人なんていないでしょう？」と驚く。「水と石けんがあればいいんだから」
「じゃあ、料理は？」
「お金持ちの家で料理作ってたこともありますよ…」と言ってまた笑う。なにか愉快なことでも思い出したような笑い方だ。
おそらく娘が笑ったからだろう。使い物にならないとナシブは判断した。こうしてセルタン地帯からやってくる移民は仕事にありつくためなら、あることないこと言う。料理だってなにかできるか知れたもんじゃない。干し肉を焼いて、インゲンを添えるくらいだろう。おれが必要なのは、フィロメーナのようにかなり年齢がいった、まじめで清潔で働き者の女だ。きちんと味付けができて、デザート作りのコツも知っている女。娘はまだナシブの顔をじっと見たままぴくりともせずに待っている。何を言ったらよいのか分からずナシブは手を振った。
「またこんどな…。元気で」
背を向けて行こうとした。そのとき、背後から声が聞こえてきた。熱を帯びた、後に引くような声だった。
「なんてすてきなの！」
ナシブは足を止めた。すてき。こんな言葉は子供のころ母親の老ゾライアに言われた以外、だれからも言われた記憶がない。
「待ってください」
振り返ると、ナシブは娘をよく見た。健康そうだ。試しに使ってみても悪くないんじゃないか。

「ほんとうに料理できるのか？」
「連れてっていただければ、たぶん分かると思います…」
もし料理ができなくても、家の片づけなり洗濯なりはしてもらえるだろう。
「いくら欲しい？」
「そちらで決めてください。いくら払いたいかは…」
「まずなにができるか見てみよう。それから賃金を決める。それでいい？」
「あたしとしてはおっしゃる値段でけっこうです」
「じゃあ、荷物持ってきて」
白く輝く歯を見せて娘はまた笑った。ナシブは疲れていた。すでに後悔し始めていた。なんて馬鹿なことをしちまったんだろう。やっかいなセルタン移民を抱え込んで、重荷になるだけかもしれないってのに。悔やんでも後の祭りだ。せめて洗濯だけでもしてくれればいいんだが…
戻ってきた。衣類を入れた小さな袋を手にしている。持ち物はほとんどない。ナシブはゆっくり歩き始めた。娘は小袋を手に、二三歩後ろをついてくる。駅を出たあたりでナシブは振り返って娘に尋ねた。
「名前はなんていうんだ？」
「ガブリエラっていいます、だんなさん」
ふたりは歩き続けた。先を行くナシブはまたシニャジーニャのこと、慌ただしかった一日のこと、船の座礁と殺人事件のことを考えていた。隊長（カピタン）と博士（ドウトール）とムンディーニョ・ファルカンの密談については言うまでもない。あの三人め、なにか隠してるな。このおれの目はごまかせないぞ。その言葉通り、まもなく大騒ぎが起きることになるのだが。実は、犯罪のニュースのために、三人の陰謀めいた雰囲気どころか、ラミーロ・バストス大佐が憤慨していたことさえナシブは忘れていた。事件が全員の注意を引いたため、その他のことは後景に退いてしまったのである。既婚女性に欲望を抱いたため高い代償を払わなければならなくなった歯医者も哀れだった。あんなに感じの良い若者だったのに。人妻に手を出すと、ずいぶん大きなリスクを背負うことになるもんだ。けっきょく最後には胸に銃弾を受けることになるんだから。トニコ・バストスも気を付けないと。さもないと同じような目にあうかもしれない。それにしてもあついはほんとうにシニャジーニャと寝たことがあるのか。それともあれはワルぶるためにひねりだしたでまかせなのか。いずれにせよ、トニコが危険を冒していることは間違いない。いつか不幸に見舞われるだろう。いつか、きっと、とナシブは思った。女の眼差しやため息や接吻のためならどんな危険も冒す価値があるというのかもしれないが。
ガブリエラは荷物を手にナシブの数歩後を歩いてくる。クレメンテのことなどすでに忘れ、移民の群れと汚いキャンプから離れられたことに幸せを感じていた。目と口で笑う。なにも履かない

足はまるで地面を滑るようだ。思わずセルタン地帯の歌を口ずさみそうになったが、けっきょく歌わなかった。寂しげな表情をしたこの素敵な旦那さんがもし歌を気に入らなかったら、と考えたからである。

密林を行く丸木船

「ジェズイーノ大佐が自分のかみさんと、それから、かみさんと寝てた先生殺したって話聞いたんすけど。旦那、それって本当なんすか?」と丸木船の漕ぎ手がメルク・タヴァレス大佐に訊いた。

「その話おれも聞いたな…」ともうひとりが言う。

「そう、そういうことだ。女房と歯医者が寝てるとこに入ってって、ふたりとも片づけた」

「女ってのはけんのんな代物ですな。男を堕落させる」

丸木船は川を上って行った。両岸には原生林が広がっている。奥地から来たセルタン移民たちは初めて見る風景に漠たる恐怖心を抱いていた。川の上に覆い被さる木々の上空では釣瓶落としに日が暮れてゆく。夜が恐ろしかった。船ははしけくらいの大きさで、カカオ袋を載せて川を下り、食料品を載せて川を上る。漕ぎ手たちが体を曲げ、尋常ならざる力を振り絞って漕いでもゆっくりとしか進まない。漕ぎ手のひとりが船首にランプを灯した。赤い光が川面に幻想的な影を創り出す。

「セアラー州でも似たような事件があったな…」とひとりのセルタン移民が話し始める。

「女ってのはすきあらば男を騙そうとすんだから。頭んなかじゃあなに考えているんだか…似たような女がいたっけなあ。聖女づらしよってよ、だれひとり考えてもみなかったぜ、あいつがあんな…」とくろんぼファグンデスが思い出を語る。

クレメンテはひとり黙っていた。メルク・タヴァレスも新たに雇った男たちとの会話に加わる。労働者ひとりひとりの長所と欠点、そして過去を知るためである。セルタン移民たちのおしゃべりは進んでいったが、どの話も変わり映えはしなかった。どれもこれも干魃で土地がひからびたとか、トウモロコシ畑やキャッサバ畑がだめになったとか、とてつもない距離をここまで歩いてきたとかいう話ばかりである。それがぽつりぽつりと語られる。だれもが噂に惹きつけられてイリェウスにやってきたのだった。豊かな土地。金がらくらく稼げる場所。将来が約束された仕事。土地をめぐる抗争。死者。干魃に襲われると、セルタン人はだれもが自らの土地を捨て、南へ向かった。いちばんおしゃべりのファグンデスが武勇伝を語る。

メルクばかりでなく、セルタン移民も聞きたがっていた。

「ずいぶん原生林が伐採されたそうじゃねえか…」

「たしかにずいぶん伐採はされたけど、それがあんたらの手に

入るかっていうと、そりゃまったくむりな相談だな。持ち主がもう決まっとるで」と漕ぎ手のひとりが言う。

「でも、金なら稼げるぞ。しかもたくさん。仕事熱心な男ならな」とメルク・タヴァレスが慰める。

「ただ、知力と胆力のある男がやってきて腕一本で原生林に入りこんでカカオを植えていた時代はもう終わった。良い時代だったが…肝が据わっていて、同じこともくろんでる奴に出会っても、ひるまずに、四・五人片づけることさえできれば金持ちになれた…」

「そのころのこたあおれも聞いたでえ」とくろんぼファグンデスが言う。「それ聞いたんでここにやって来たんだが…」

「鍬は嫌いか、あんた」とメルクが訊く。

「嫌いってわけじゃねえすよ、だんな。ただリボルバーを扱う方が巧いんでね…」と言って連発銃を撫でる。

「まだ原生林は残ってるよ。しかも大きいのが。たとえば、バフォレー山の方だ。あんなカカオに適した土地はない…」

「ただし、森は少しずつ買わにゃあならんよ。ぜんぶ測って登記してあっから。旦那さまもそこに土地をもっておいでだ」

「猫の額ほどだがね」とメルク。「まあおまけみたいなもんだよ。でも神様がお望みなら来年から開墾するつもりだ」

「今じゃあイリェウスの株はうなぎのぼりさ。昔とは大違いよ。重要な土地になってきてっからな」と漕ぎ手のひとりが嘆く。

「それでリボルバーが役に立たねぇってわけか」

「むかしゃあ、勇気が男の価値だった。今じゃあ金持ちになるなあトルコ人の行商人とスペイン人の商店主ばかりよ。ずいぶん変わったもんさね…」

「あの時代は終わったてことだ」とメルクが説明する。「今や発展の時代だ。事情が違う。だがな、働き者はまだまだやって行ける。潜り込む場所ならいくらでもあるぞ」

「もう街なかで銃ぶっ放すこたできねえよ。すぐにとっつかまえようとみんな手ぐすね引いてまってっからな」

丸木船はゆっくり川を上っていった。宵闇が船を包む。原生林からは動物の鳴き声が聞こえてきた。突然木の上で鸚鵡が大きな叫び声を上げる。クレメンテだけが黙っていた。その他の男たちはみんなおしゃべりに加わって、見聞きした話を語ったり、イリェウスについてあれこれ言い合ったりしている。

「ちょくせつカカオを輸出するようになったら、この町ゃもっともっと大きくなるってが」

「ほだな」

セルタン移民は事情がよく分かっていなかった。メルク・タヴァレスが説明する。カカオはイギリス、ドイツ、フランス、アメリカ合衆国、スカンジナビア半島、アルゼンチンといった外国に輸出しているが、それはすべてバイーアの港から出てゆく。税金や輸出による収益はすべて首都に入り、イリェウスにはその

おこぼれすら入ってこない。そもそもイリェウスの港口は狭くて浅い。大きな船が通過できるようにするためには、かなり大がかりな工事をしなければならない。それは不可能だという者さえいる。ただ、大型貨物船がカカオを求めてイリェウスの港に来られるようにならなければ、ほんとうに発展を云々することはできない、と。

「今はムンディーニョ・ファルカンとかいう男の話で持ちきりですな、旦那。こいつがきっと問題を解決してくれるとか…えらく抜け目のない男だとか、そんな噂ですぜ」

「あの娘んこと考えているんか?」とファグンデスがクレメンテに訊く。

「またねって言葉もかけてくれなかった…目でさえ」

「娘のおかげで頭がどうにかなっちまったんだろ。これでふつうに戻ったっつうこった」

「知り合ってもいなかったみたいに…またねって言葉さえ」

「おなごってえのはそんなもんだ。あいつらに別れのあいさつなんかしてやるこたねえ」

「たしかにあいつはたいした野心家だ。ただ、わがラミーロ君を抜きにして港口の問題を解決できるだろうか?」とメルクがムンディーニョ・ファルカンについて話す。

丸木船の真ん中ではクレメンテがアコーディオンを撫でている。ガブリエラの歌声が聞こえてきたような気がした。クレメンテは探すようにあたりを見まわす。川は原生林に囲まれている。木々と絡まり合った蔓植物。フクロウのぞっとする不吉な鳴き声。黒々と繁茂する鬱蒼たる緑。地面がむき出しの灰色がかった半乾燥地帯（カアティンガ）に似たところはみじんもなかった。漕ぎ手のひとりが原生林のある場所を指さす。

「オノフレとアマンシオ・レアールの旦那の殺し屋たちが撃ち合いをやったのはこのあたりだ…ゆうに十人は死んだな」

この土地なら金（かね）は稼げるだろう。働くことさえ厭わなければ。稼いで町に戻ったらガブリエラを探すんだ。どうにかしてあの女を見つけ出す。

「あいつのことなんかもう考えるなって。忘れっちまいなよ」とファグンデスが忠告する。くろんぼの目は密林を追っているが、ガブリエラの話になると声が和らぐ。「忘れっちまいなって。ありゃあんたやおれ向きの女じゃないってが。おれらはさ、あんな娼婦みたいんじゃなくて、それこそ…」

「おれの頭のなかに入ったまま出て行かないんだよ。追い出そうたって追い出せないんだ」

「正気になりなって。ありゃ一緒に暮らせる女じゃないがよ」

「それ、どういうことだ?」

「どういうって…そういう女だってことよ、おれに言わせりゃ。あいつと寝るこたできるかもしんねえ。ナニすんのもな。でも、自分のものなんかにゃできねえって。物みたいに持ち主になるこ

たできねえ。もっとも、だれにもできねえ相談だけんどな」
「なぜだ？」
「なぜって言われてもなあ。よく分かんねえけど、そうなんだよ」
なるほどファグンデスの言うとおりだ。夜になれば一緒に寝るのに、翌朝にはそれさえ覚えていない。他人のような目でおれを見ていたっけ。十把一絡げの扱いだ。どうでもいい男みたいに…
闇が丸木船を覆い、包む。密林がますます間近に迫ってくるような気がした。まるで覆いかぶさってくるような気配。フクロウの鳴き声がとつぜん闇を引き裂く。ガブリエラのいない夜。褐色の肉体の、無償の笑いの、果肉のような唇のない夜。ガブリエラはさよならさえ言わなかった。よく分からない娘だ。クレメンテは胸が締め付けられるように苦しくなった。そしてそれはすぐに確信へと変わった。ガブリエラに会うことは二度とないだろう。あの娘を腕に掻き抱き、その胸を押し潰して、歓びの声を耳にすることは二度とないだろう、と。
メルク・タヴァレス大佐が夜の静寂を破って声を上げ、クレメンテに注文を出す。
「あんた、ひとつなんか弾いてくれないか。退屈しのぎに」
クレメンテはアコーディオンを弾いた。木々のあいだから月の光が川に降り注ぐ。クレメンテの脳裏にガブリエラの顔がぼんやりと浮かんできた。遠くに小さなランプのような、カンテラのような光が見える。聞こえてくる音楽は、女を失い、永遠に孤独のなかですすり泣く男の声のようだ。密林で、月の光を満身に浴びて笑っているのはガブリエラだった。

（続く）